チートな俺が異世界へ進出！

四次元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートな俺が異世界へ進出！

【Ｎコード】

Ｎ４２６６Ｚ

【作者名】

四次元

【あらすじ】

「私達の世界を救ってください！」「いいよー」

退屈な日常を送っていた高校生、霧島燈弥（きりしまとうや）。異世界からやって来たという女性の頼みで、ノリノリでいざ戦乱真っ只中のファンタジーの地へ！　腐敗した政治家、やる気のない市民など戦争以前の問題が山積みの国に迎えられながらも、燈弥は二年以内に戦乱を終結させることを宣言し……

◇安心・安全の主人公チート物です。不定期更新になりますが、読者様からのツッコミをお待ちしております。┐〇ペコリ

0．　ぷろろーぐ？

Ｓ県Ｓ市Ｍ町。県立鳴海ヶ丘高校。
この国においては何の変哲も無い普通制の高校であるが、ただ一つ名物と呼べるものがある。
今では物置同然にしか使われていない、旧校舎一階の一角にある男子トイレ。
この一角の大便器の個室の扉が何をやっても開くことが出来ず、『開かずのトイレ』とまことしやかに騒がれていた。
どのくらい開かずかというと、見た目は金属の金具を取りつけたごく普通の木製のドアにも関わらず、異常なほどに防御力があるのである。
素手で蹴る殴るなんてもってのほか。モップの柄や金属バットを叩きつけてもびくともしない。業者を呼んで、チェーンソーや溶接用のバーナー、果てはダイヤモンドカッターを持ちだしても傷一つ負わないのである。じゃあ周りから崩そうと校舎ごと重機にかけようとしても、何やら不思議な力で機械が止まる始末。他にも除霊師や超能力者などを全国から呼び寄せたが、全く手に負えず。最終的には国側も「金が勿体ないし、この国ではよくあることだろう」と完全放置を決め込んだ。
そのせいで未だに旧校舎を取り壊せずにいるのだが、心霊スポットとして一部のマニアにとっての名所となっている。実際は別に呪いの類も一切無いので、学校側も「何をやっても壊れないトイレの扉」として、外部から入場料を取っている。
「ところがそうでもないんですよ！」
と、２年６組の帰りのＨＲの後の教室に、歴史マニアのＲ君の声が響き渡る。

「色々調べてみたら、２０年前にあの付近で女子生徒が行方不明になっているんです！　あそこが開かずのトイレと呼ばれたのもちょうどその時からで……」

Ｒ君の熱弁もどこ吹く風、クラスの大半は放課後のＢＧＭ代わりとしか思っていない。

「でも２０年前の話だしねー」
「幽霊見たって騒ぎもないし」
「そもそも、男子トイレなのに何故女子生徒なんだ？」

今どきの冷めた子供を体現するかのように、話を流すクラスメイト達。

そんな中、教室ないに机を叩く音が響き渡る。

「……どうしたの？Ｙ君」
「いきなりポップンの練習？」

Ｙ君は声変わりすら始まっていない、幼い風貌のおとなしい男子であった。しかし音ゲーをやらせると人が変わったかのように髪が逆立ち、顔つきもロケンローラーと化すので、鬼ドラマーとしての将来が期待されている。ちなみにこの設定は今後生かされることはない。

「俺……聞いたんだ……」

彼の一言にクラスの喧騒が一瞬で止む。Ｒ君は心の中で自分との扱いの違いを嘆いていた。

「この前何となく夜中に目が覚めて、あのトイレに行ってみたんだ……　午前４時半くらいだったかな？　いきなりドアの中からドンドンドンッて叩く音がして、その後中から……女の人の声が……！」

Ｙ君の独白をクラスメイトは、はては廊下にいた隣のクラスの生徒まで固唾を呑んで見守っていた。Ｒ君は心の中で自分の存在意義を必死に問いかけていた。

「何て……言ってたの……？」

「『開けて……誰か……誰か……いませんか……？』って……！　その後に呻くような声も聞こえて……！　凄く怖くなって、すぐに逃げ出したんだけど……」

興味津々で耳を傾ける生徒たち。女子生徒の一部は「私そういう話弱いんですぅ」的な、か弱い女の子を演じるために小さな悲鳴を上げる者もいた。

「やっぱり幽霊とかはいるんですよ！　明日は休みだし今夜にでも僕と一緒にそのトイレに行く者はいませんか！？」

Ｒ君の提案は華麗にスルーされ、生徒の大半はＹ君により詳しい話を聞こうと詰め寄っていた。そして話し合いの結果、クラス代表として中二ネーム三兄弟と呼ばれる男子生徒達がその日の晩、現場へ向かうこととなった。

霧島（きりしま）　燈弥（とうや）。

一之瀬（いちのせ）　蒼鉛（そうえん）。

神木（かみき）　鞦（しゅう）。

三人はＹ君の証言を頼りに、午前４時頃に学校に侵入。旧校舎の玄関の前に置いてある箱に、勤務時間外入場料一人５００円を投入し校舎の中へと足を踏み入れる。非常に危険を伴う（かもしれない）この任務を行うにあたって、彼らはクラスメイトからいくつか武器を募った。

ガス銃、金属バット、鉈、スタンガン、警棒、アーミーナイフ、防犯スプレー、非常食、防犯ブザー、お経の入ったＭＰ３プレーヤーと大音量スピーカー、エリクサー（自作）、セクハラ防止用のレッドカード　（『あなたのその行為、セクハラでは？』と書かれている）　ｅｔｃ……

１ナノの憂いも与えないこれらの重装備を抱え問題の現場へと向かう。

「ただ今午前４時３５分っと」

「幽霊来るかなー？」

「一応お経のセッティングはしとくぜ。どれが有効か分からんから、カテゴリ内のランダム再生でいいか」

特に緊張感も無く三人は例のトイレの前で待ち続ける……が、ここである事に気づく。

「……臭ぇ！　誰か消臭スプレーとか持ってねーか？」

「トウガラシ抽出物の奴しかねーよ」

「あーこれはとんだ誤算だったなー」

流石にこの空間に１０分以上いるのはきつい、三人がそう思ってとりあえずトイレの外まで退避しようとした、まさにその時であっ

た。

ドンドンドンッ！

「……ッ！」

「ほんとに来たっ！」

ドンドンドンドンッ！

「間違いなくこの中からだ……（小声）」

燈弥がそのドアに実際に触れてみて確信する。

『どなたか……どなたかいませんか……！？　開けて……開けてください……！』

三人は顔を見合わせ頷く。

まずは先手必勝。幽霊タイプなら精神攻撃が一番有効なはず！

鞦がスピーカーの音量を最大にしてＭＰ３プレーヤーを流す。

『……えーこの厳しい世の中を幸せに過ごすためにはね、一日一日を大事に、大切に過ごして下さい。今日はいい事があると思って……』

……

「何でお経カテゴリに瀬戸内〇聴が入ってるんだよ！？」

「俺（蒼鉛）が大ファンなんだよ！　悪いか！」

鞦が別のお経に変える間もなく、ドアを叩く音が止まる。

『そこに誰かいるのですか！？』

しまった、と三人は戦闘態勢に入る。

「ええ、いますよー　あなたは幽霊さんですかー？　アーユーアンエイリアーン？」

『ゆ、ユーレイ！？　違います！？　私はシンクラッド王国親衛隊のセレーヌ＝マシュガルという者です！　あの、よろしければこの扉を開けて頂けませんか！？　こちら側からでは全く……』

シンクラッド？　親衛隊？　何そのいかにもなファンタジー臭い用語。

三人は顔を見合せたままどうしたものか戸惑う。

「いやー開けてくださいって言われましてもね、こっちもそのドアが開かなくて非常に困ってるんですよ」

『ええ！？　そんな……』

その事を伝えた途端、女性の声が涙交じったようなものになる。

『お、お願いです！　何とか出来ませんか！？　私もあまり長い時間ここにいる事は……』

「なんで？」

『その……臭いが……』

２０年間も放置されてきた大便器だ。しかも汲み取り式。個室の外にいてもその片鱗が漂って来るというのに、その中は想像を絶するものに違いない。三人はこのセレーヌという女性（？）を気の毒に思いつつも、手をこまねくことしか出来ない。

「どうしようか？」
「親衛隊か幽霊かはともかくとして、何だか可哀想だな」
「両側から力を加えたら開いたりして」

燈弥がドアノブに手を掛ける。

「セレーヌさんでしたっけ？　中から鍵はかかってませんか？」
『鍵？　……この取っ手の下のものですか？』
「そうそう、それが開けば」
『駄目です、完全に錆ついててびくともしません。何度か剣で壊そうともしたんですが余計に歪んでしまって』
「（剣なんて持ってるのかよ……）」

これはもう駄目かもしれんと、その場が諦めモードに入った時、トイレのドアの隙間から光が漏れて来る。

『きゃっ！？』
「どうしたんですかー？」
「おい、何か隙間から光が……」

カチリ。

「……？」

辺りに金属音が響き、燈弥はゆっくりとドアノブを回して、引く。

「あっ」

そして驚くほど簡単に、あっさりとトイレのドアが開いた。

蒼鉛が後ろからライトで個室の中を照らす。

「っ……！」

中には、眩しそうに手でライトの光を遮っている女性の姿があった。

ブロンドのシニヨンヘアに明らかに欧米風の顔立ち。そしていかにも中世風の鎧。

「外人だ」

「外人の幽霊だ」

「ユーレイではありません……」

中から表れた女性はもう辛抱たまらないといった様子で個室から出て、大きく深呼吸する。

「や、やっとまともに息が……」

燈弥が個室の中を覗き込むと、鼻が曲がりそうなほどの悪臭が便器から漂って来る。

「……いつからこんな所にいたんですか？」

「今日は先刻来たばっかりですが、かれこれ一月はここを訪れて……」

「一ヶ月もずっとこんなことを……？　この中で？」

「はい……　しかしこの程度の苦難、勇者様に出会えると思えば……」

女性はやれやれといった感じであったが、すぐに咳払いをして姿勢を正す。そして燈弥に向かって片膝をつき、手を眼前に組んで頭

を下げる。

「……御見苦しいところを失礼。改めまして勇者様、此度は私達の世界を救って頂きたく参上いたしました」

0.　ぷろろーぐ？（後書き）

この度、初めて異世界召喚ファンタジーを書かせて頂く四次元（よつぎはじめ）という者です。
ツッコミどころ満載のストーリーにする予定なので、暇つぶしにでも読んでもらえれば幸いです。

1.　いきなりのばーさす

「え？　勇者って……俺？」

燈弥がキョトンとしながら自分の顔を指差すと、セレーヌも少し困った様な表情になる。

「え？　あ、はい」

「おいおい！　ちょっと！　何で燈弥が勇者なんだよ！？　俺達は違うの！？」

後ろから蒼鉛が彼女に対して抗議の声を上げる。

「いや、何故と申されましても……決まりとしか……」

「何だよ、その決まりって。俺達と燈弥の何が違うんだよ！？」

「その……　こちらの世界に来て最初に会った方が勇者様だということになってまして……　詳しい話は私にも……」

セレーヌは戸惑いながらも、気まずそうに答える。

「何だよその雛鳥みたいな決定法は！？　納得いかねぇ！」

「『私達の世界を救ってください』って異世界ファンタジーとかそういうのだろ？　燈弥の代わりに俺が勇者とかじゃだめ！？　どーせ適当なんだろその辺！？」

「おいお前ら何言ってんだ！　俺だって行きてぇよ異世界！　しかも勇者なんだろ！？　行かない手はねぇ！　よっしゃセレーヌさん！　あなたの見立ては間違ってない！　さぁ早速俺を異世界へ！」

俺が俺が、とわーわーもみくちゃになる少年たちを見てセレーヌは呆気にとられていた。取り留めのない争いがしばらく続き、最終的に三人の意見がまとまる。

「よし、セレーヌさん。この際誰が勇者だとかはどうでもいい。俺ら三人まとめて異世界に連れてってください！」

「無理です」

「えぇー」というブーイングの嵐が少年達から巻き起こる。

「私達の世界に連れていけるのは一人だけです」

そう言うとセレーヌが懐から古びたネックレスの様な物を取り出す。

「次元の扉を通るにはこれを身につけないといけません。今手元にあるのは私が身につけている物を含めて二つのみ……　つまりはこの中からお一方だけしか、あちらへ連れていくことが出来ないのです」

それを聞いて迷わず鞦の手が上がる。

「……何でしょうか？」

「セレーヌさんはこっちの世界に興味とか無い？」

セレーヌは7秒ほどしてその質問の意図に気づき、思わず身構える。

「だ、駄目です！　私にも帰ってからやる事が色々あるんです！」

「えーこっちの世界も結構楽しいと思うよ？　異世界から来た人な

ら刺激だらけの生活を送れると思うしさ」

他の二人も腕を組みながらうんうんと頷く。セレーヌはこれまでに味わったことのない身の危険を感じた。

「……帰らせて頂きます」

「えっ！？」

「勇者様はまたの機会に……」

彼女が個室に戻ろうとするところを、すぐさま蒼鉛が道を塞ぐ。

「どいてください……　たとえ本当に勇者であられたとしても、今のあなた達を連れて帰るのは気が引けます……」

「やだ、二人まで異世界に行けるってのを諦めるわけにはいかねー」

「そうですか……」

セレーヌが腰元に手を掛けたかと思うと、蒼鉛の頬に一閃が走る。

「げっ」

蒼鉛の頬のから血が垂れる。セレーヌの握っている獲物は間違いなく実剣であった。これまでの畏まった表情とは異なり、完全に戦う者、殺しが出来る者の目つきになっている。

「もう一度言います。そこをどきなさい。次は本当に殺しますよ？」

今までとは打って変って冷たく罵るような口調にも、蒼鉛は軽く口笛を鳴らすのみであった。

「（どうせ斬れっこないとでも思ってるのかしら……　まぁ、彼は

勇者でもないし）」

セレーヌは何の迷いも無く、剣を蒼鉛の頭の上から垂直に振り下ろす。

「ッ！？」

周囲に鈍い金属音が響く。

セレーヌの剣は燈弥の握った金属バットによって受け止められていた。

「今のは本気で殺るつもりだったな？」

「……トーヤ、と言いましたか」

「へい」

セレーヌは一歩後ろに下がり間合いを取る。

「仮にも一度勇者様と認めた方と交えるのは心苦しいですが……私とて騎士の端くれ」

「ああ、二流だな」

「何ですって……？」

燈弥は金属バットで自分の肩を叩きながら、余裕たっぷりに答える。

「『次は殺す』なんて二流が吐く台詞だ。自分から負けフラグ立ててるってやつ？　邪魔だと思う奴は即始末しとかないと、いつか足をすくわれるよ」

「……知ったような口を！」

セレーヌは瞬時に燈弥の胸元めがけて突立てる。彼女の頭には金属バットが棍棒のようなものだと認識され、始めから打ち合うという発想はなかった。
だが、燈弥はそれを最小限の動きで回避する。

「なにっ！？」
「考え方は悪くないけど、当たり判定がねー」

セレーヌが体勢を戻す間もなく、燈弥は瞬時に彼女の懐に飛び込み下顎にアッパーを叩きこむ。彼女の体が軽く浮き、そのまま壁に叩きつけられた。

「へへー俺の勝ちー　しかし、騎士相手でこれか。結構やっていけそうだな」

まるで遊んでいるかのような燈弥の言い草に対してセレーヌは名状しがたい寒気を覚えた。そして、燈弥はまだ意識が朦朧としている彼女に近づき、満面の笑みで手を差し出す。

「さ、ネックレスちょーだい」
「あー！　ずりぃぞ燈弥！」
「この人にも勝ったんだし、俺は異世界行き確定だろ？」

彼女はまだ剣を離していないというのに、少年達はまたもや下らない言い争いを続ける。

「（私も未熟とはいえ、剣を持った相手にこの余裕……　大物ではある、か）」

セレーヌは体の感覚を徐々に取り戻すと、頭を軽く振って剣を収

める。

「あ、お早い御復帰で」

「……失礼いたしました、トーヤ様。あなたが勇者だというのも本当、かもしれません」

よろめきつつも立ち上がる彼女に向かって送られるのはまたも非難の言葉。

「かも！？　まだ、かもなのかよ！？」

「私も確証は持っていませんので……」

セレーヌは燈弥に向けて手を差し出す。その手には例のネックレスが握られていた。

「ですが、素質は十分だと思います。どうか私と一緒に来ていただけませんか？」

「ひゃっほーい！」

燈弥は乱暴にセレーヌの手からネックレスを奪い取り、手にかざしてその場を跳び回る。その様子を見て、セレーヌは軽く後悔しつつもトイレの個室へと向かう。

「待てや」

そんな彼女の前に二人の少年が立ち塞がった。

「……勘弁してもらえませんか？」

彼女の顎をさする様子も知ったこっちゃないと言わんばかりに、

二人して首を横に振る。

「残りの椅子は一つ……次は俺と勝負だ！」

「いやいや、先に俺とやってもらう」

先程の燈弥との立ち回りを見て、自分でも勝てると確信したのか二人の少年は互いに譲らない。そんなやりとりを見ながらも、セレーヌは必死に跳びはねている燈弥に目くばせをする。

「へへ、何か勘違いしてないか？　お前ら」

互いに掴みかかっている蒼鉛と鞦の前に立ち、燈弥はあざ笑うかのように言い放った。

「こういう展開の時はな……勇者は一人って決まってるもんだぜ」

二人が燈弥に気を取られた瞬間、セレーヌは二人が争っていたせいでできた僅かな隙間を潜り抜け、トイレの個室へと入る。

「あ！　この！」

蒼鉛の手をするりとかわし、セレーヌはそのまま大便器の中へ飛び込む。すると彼女の体はそのまま吸い込まれるかのように姿を消してしまった。

「うげっ！？　次元の扉ってここかよ！？」

「そうだ！　とう―」

「隙ありぃ！」

二人が気づいた時には既に遅し。燈弥は防犯用の痴漢撃退スプレ

ーを二人の顔面に噴射する。ハバネロ由来のカプサイシンが有効成分となり、二人の視界を封じる。

「この……やろ！」

闇雲に手を振り回す二人であったが、燈弥はそれを難なく避け、そのまま大便器の中へとダイブする。ようやく二人の視界が戻りかけた時には既にその場に他の人間の気配はなかった。

「とうや～！　あのやろ～！　自分だけ……」

「いいなぁ～　あんな外人さんと……」

悪臭が漂う旧校舎の男子トイレの中、ただ残された二人。この匂いに長く耐えられないと思わず大便器の個室の扉を閉めるが、すぐに金属音が鳴る。

「あ、開かない……」

「ここって異世界への入り口だったんだな……」

気が付くと自分たちの持ってきた荷物も色々無くなっていた。ちゃっかり燈弥が餞別代わりにと持ち出したのであろう。

「どうするよ……」

「どうするって……帰るしかないだろ？」

「みんな信じるかな……燈弥一人いなくなって」

残された少年二人は渋々荷物をまとめてその場を退散する。

幸いにして燈弥には「保護者」はいないので、別段これから面倒な取り調べが待っているわけではない。いや、蒼鉛と鞦にも保護者

はいない。クラス、学校の誰ひとりとしてそんなものは持っていない。故にこの二人は燈弥を羨む。自分たちのこれからを比較してしまうため……

「ちくしょぉー！　燈弥ぁー！　とっととくたばれー！」

「そして次は俺が勇者だー！」

徐々に日が射していく夜明けの空に、夢見る少年二人の声が響いた。

2.　いせかいってこんなもの？

「セレーヌさん……いつになったらここ出れるの？」
「もう少しの辛抱です……」

水滴の音と小動物の鳴き声が微かに響き渡る暗闇の中、燈弥とセレーヌは筏を漕いでいた。
現在位置、下水道。彼らは蝋燭の僅かな火を頼りに、悪臭立ち込める狭い空間を進む。

「トイレを抜けた先は下水道とか……幸先悪いなぁ。折角の異世界召喚ライフなのに……」
「何をそんなに楽しみにしているのか知りませんが、これからあなたには戦って貰わないといけないんですよ？　当然、命を落とす可能性だってあります」

この悪臭のせいもあるのか、セレーヌは苦々しい顔で燈弥をたしなめる。正直彼女自身も彼をこんなにすんなり説得出来るとは思わなかったのだ。今までの暮らしを捨てて、全く未体験の地で戦わせるということがどんなものか。こちらの世界に来る事を拒まれたら、どうしたらいいのだろうか？　ずっとそんな不安を抱えていた。しかし、そんな気苦労もどこ吹く風、目の前の少年は呑気に鼻歌を歌っている。
おまけに燈弥はオールを握った経験がないにもかかわらず、すぐに漕ぎ方のコツを掴んでいた。ほどなくしてセレーヌよりも速く焦げるようになってしまい、筏の進み方も偏ってしまう。

「……トーヤ様、もう少しゆっくり漕いでくれませんか？」

「へーい、了解」

燈弥が軽口を叩いてほどなくすると、前方から光が見えて来る。さらに吹き込んでくるのは、久かたぶりのまともな空気。

「よーし！　到着っと！……で、いいんだよな？」

「はい、そこの岸に寄せましょう」

二人は筏を岸につけ、水路の階段を上る。その先に入ってきた光景に燈弥は思わず声を上げる。

「おおー　いかにもな中世って感じ！　ファンタジーだねー！」

「ここがシンクラッド一の商業都市、スミナフです」

赤白レンガ造りに、傾斜のきいた屋根が乗っかった家がずらりと並んでいる。加えて街から離れていても聞こえるその喧騒と何やら楽しげな音楽。

「まずはこの町の領主のアイゼン様の所に伺います。さ、こちらへ」

「え？　わざわざ異世界から連れて来た勇者なんだから最初は王様の所じゃないの？」

「……どうしてそのような発想に至るのかは分かり兼ねますが、このままの身なりでは失礼でしょう？」

燈弥もそう言われて初めて気づいたが、服に下水の水滴が飛び散りいくつもの染みを作っている。おまけに長時間悪臭のする空間にいたので、彼ら自身が発する臭いも相当なものであった。

「……こっちの世界に風呂とかシャワーとかある？」

「シャワーというものは存じませんが、浴場なら」

それを聞いて燈弥も気を取り直し、セレーヌの後をついて行く。彼女は現状を考えて、町の中を通ろうとせず、そのまま町の外周をぐるりと大回りして領主の屋敷へと向かう。町の外には広大な田園風景が広がっており、その開放感がさらに燈弥を上機嫌にさせた。

「でっかい農地だなー　俺の国にはこんな広い土地が無くてさー」
「それだと食料を作るにも大変でしょう？」
「ああ。実際半分以上が他の国からの輸入に頼ってるんだ」
「土地の事情もあるのでしょうが、あまりよろしくないですね……」

今では大した未練もない祖国、日本の事を軽く思いだしながら、燈弥はぼんやりとその風景を眺めていた。……が、目の前の畑に気になる物を見つけ、鼻をくんくんと鳴らす。

「ねぇセレーヌさん、ここ……　畑だよね？」
「はい。今はちょうど休耕期のようですけど……　それが何か？」

すると燈弥は何を思ったのか急にわき道に逸れて、畑の中に飛び降りる。さらに地面の土を一握り取って、匂いを嗅いだり、ぼろぼろに崩してみたりする。

「ん～？」

実際に手で土の感触を確かめてみて、燈弥の顔が急に険しくなる。

「トーヤ様！　あまりお時間を取られましても……！」

後ろから慌てた様子のセレーヌが駆け寄って来る。

「セレーヌさん、ここの畑っていつもは何植えてるの？」
「た、確か麦だったと思いますけど」
「……麦ねぇ」

名前は同じでも自分の世界のものとは品種が全く違うものかもしれない。そんなことを念頭に置きつつも、燈弥たちは再び屋敷への道を進み始めた。セレーヌは少年の前を歩きつつも、その突飛な行動の意味を理解し苦笑いを浮かべる。

「（流石に鋭いわね……！）」

その後、歩く事３０分ほど。燈弥たちは一際大きい建物の門の前に辿り着く。セレーヌが門番のところまで駆け寄り何やら話をすると、すぐに重たそうな鋼鉄の門が開かれた。中に入るとこれまた広大な庭が広がっており、色とりどりの花を咲かせる植物が植えられている。

「そういえばそのアイゼンって人は貴族とかなの？」
「はい、正式にはアイゼン侯爵ですね。それと出来れば様をお付けください」
「了解。それと爵位はいくつあるの？」
「５つですが……」
「公・侯・伯・子・男？」
「はい、アイゼン様はその上から二番目のお方です」

また何やら考えている燈弥を見て若干の不安を抱きつつも、セレーヌは屋敷の扉を叩く。ほどなくして、ドアの中心にある覗き穴のような小さな円形の蓋が開き、何やら話を始める。
燈弥も何となくその辺の庭を見まわしていると、遠くの方に小さ

な人影を見つけた。まだ幼い少女のようであったが、こちらに気づくと軽くお辞儀をしてそそくさとその場を離れる。

「トーヤ様、まだアイゼン様は視察からお戻りになっていないみたいです。その間に風呂に入らせて頂いて、服も着替えておきましょう」

「ああ。ようやく風呂か……　流石にこの臭いもなれたけど、やっぱ不味いよな」

燈弥は染みだらけの服をパタパタとはためかせた。

「こちらへ。使用人たちの勝手口から中に入らせて頂きます」

「え？　風呂ってこの屋敷のを使っていいの？」

「ええ、私はいつも利用させてもらってます。トーヤ様も客人扱いですのでお気兼ねなく」

ちょうど先程の女の子がいた方角に向かい、小さな扉から屋敷の中に入る。使用人用の通路とはいえ、壁も床も手入れが行き届いており、燈弥もこの汚れた服で押し入るのが少し申し訳ないようにすら感じた。しばらく廊下を進むと、突きあたりに向かい合うようにして二つの入口があった。

「では、私はここで。着替えは入浴しているうちに用意してくれるでしょう」

「混浴じゃないのか……」

「ありません」

きっぱりと言い切り、セレーヌは左の部屋に入って行く。燈弥もすごすごと右の部屋に入る。

中には日本の銭湯の如く広い脱衣所があり、その先の木製の引き

戸を開けると、その先には見事な石造りの浴場が広がっていた。中には松明がいくつかあるが、壁の一面が擦りガラスのようになっており、浴場全体が日中の明るい光に照らされいた。

「ほー　良く出来てんなー　しかも誰もいない……　貸し切りかよ！」

昼風呂なんて久しぶりだと言わんばかりにテンションの上がった燈弥は、荷物を下し服を適当な籠の中に脱ぎ捨てる。湯船に軽く手を入れると、ちょうどいい温度になっておりまさに入り頃だ。

浴場の中には色々と見慣れぬ器具があったが、そんな物には目もくれず手ぬぐいとお湯だけで体の汚れを簡単に落とし、そのまま浴槽の中へダイブする。

「ひゃー！　気持ちえええー！　風呂のある異世界とか最高だな！」

まさに極楽至極。燈弥は学校の教室くらいの広さはありそうな浴槽の中を軽く泳いだりして、しばらくの間最高の湯を堪能した。

ガタン。

急に脱衣所の方から聞こえてきた物音に気づき、燈弥はふと手足を止める。屋敷の人が着替えを用意してくれていることを思い出し、流石にあまり音を出してはしゃぎ過ぎるのはどうかと彼の理性が働いた。

「（ふー　早く行ってくれないかなー？）」

浴槽の淵に頭と腕を乗せて、湯船に浮かんで静かにくつろいでいると、いきなり脱衣所の扉が開かれ、燈弥は思わず顔を上げてしま

う。

「失礼いたします。お湯加減の方はいかがでしょうか？」

女の子。

やや茶色ががったおかっぱ頭のまだ幼さの残る使用人の少女であった。緊張しているのか、元々そんな感じなのか顔持ちはやや固い。

「ああ、さいこー。君は……さっきに庭にいた子だね？」

はい、と小さく少女は返事をする。

「勇者様は長旅でお疲れと聞いております。よろしければ私が按摩をして差し上げますが……」

長旅というほどのものでもないが、筏を漕いだりしたので筋肉は結構張っている。

「いいね、助かるよ。んじゃ、風呂上がりにでもお願いするかな」

軽い気持ちで返事をした燈弥であったが、少女は首を軽く横に振る。

「いえ、湯冷えするといけませんので……」

「もしかして風呂の中でするの？　濡れるよ？」

「大丈夫です」

少女は軽く微笑むと自分の服に手を掛けた。

2.　いせかいってこんなもの？（後書き）

R－15の限界に挑戦してみたり

3.　さーびすさーびす（前書き）

※えっちな描写があるので、苦手な人は御注意を

3．　さーびすさーびす

少女は何の躊躇も無く燈弥の目の前で服を脱ぎ始め、あれよあれよと生まれたままの姿に。胸の膨らみや腰まわりは年相応に控えめな感じであった。燈弥もここはあえて実年齢を聞くべきではないと直感し、口をつぐむ。彼の見立てでは1△歳から1×歳くらいに感じられた。

「もう少しお待ち下さい。すぐに準備が終わりますので……」

浴場の片隅にある物置のような所から、彼女の背丈よりも大きい筒状の物を取り出し、浴槽のすぐ隣にそれを広げる。その他にも何やら小道具のようなものを脇に置いて、最後にマットにお湯を掛け準備完了。燈弥は少女の動作を眺めながら、興奮するというよりも、寧ろ感心していた。そのあまりにも手際の良過ぎる動き、一朝一夕で培われたものではない。

「さぁ、いつでも大丈夫ですよ」

少女は笑顔で手を広げ、燈弥を誘う。色々な所が丸見えの、あまりにも無防備な状態。

「本当に大丈夫なのか？　あとン十万円とかぼったくられたりしない？」

「これはここのサービスですよ。お気をなさらずに」

少女の顔に悪意は感じられない。寧ろ何を考えているのかが解からないように思える。

「……その頭のカチューシャは取らなくていいの？」
「え？　あ……！　す、すみません！」

少女は露骨に慌てたような声を出し、先程とは別種の速さで脱衣所まで戻りカチューシャを外して来る。息を切らせて戻って来た彼女の顔は、ほんのり赤く染まっていた。

「し……失礼しました……」
「別に何となく気になっただけだからいいよ」

少女のこの反応を見て、燈弥も彼女への応対の仕方を何となく理解する。

「（この子はプロなんだな。ならそれ相応に扱ってやらないと）」

風俗云々に限らずプロはプロとしての扱いを相手に求めている。下手に気遣ったりすると、かえって相手のプライドを傷つけてしまうかもしれない。この娘は自分の裸を見せることよりも、仕事のミスを指摘されることのほうがよっぽど恥ずかしいのだろう。

「仰向けとうつ伏せどっちがいいかな？」
「お好きな方でいいですよ」
「じゃあうつ伏せになるわ。全身マッサージコースでお願い」

燈弥は無防備にうつ伏せになる。彼女の敷いたマットが織物だったのが意外であったが、どうやらちゃんと防水性能はあるようで、しかも柔らかく自然な感触で心地よい代物であった。
少女はまず始めに足から揉みほぐしていき、足首、ふくらはぎ、太ももとリンパマッサージの基本にそって按摩をしていく。燈弥も最初は胸や秘部で体を洗われたりしないかと、やや不安になってい

たが、彼女が思いのほか真面目にマッサージをしてくれているので次第にリラックスした気分になる。正直なところもう少し力を入れてくれた方がよかったが、なにせ少女の細腕なのであまり無茶な注文は言えない。プロ相手にもこういう気配りは必要だ。

「特に揉んでほしい所があったらおっしゃってくださいね」

「あ～　手から二の腕にかけてを重点的に～」

「それでは一度仰向けになってくれますか？　そちらの方がやり易いので」

既に彼女の指示に逆らう気は失せており、燈弥は言われるがままに体をひっくり返す。すぐに燈弥の下のモノの上に温めたタオルを掛けてあげるあたりに、彼女の仕事ぶりが感じられた。結構勃ってはいるものの、それが自分でも気にならないほどに少女のマッサージが気持ち良い。手と腕が終わると今度は耳つぼを揉みこむ。

「お髭はどうします？　剃りましょうか？」

「……お願いします」

何とも多才な彼女に、なすがままにされる主人公。泡立てた石鹸を塗られた後、上からお湯で温めたタオルを乗せられしばらく待つ。いい具合に髭がふやけたら、剃刀で……

「（これがあるから美容院には行きたくないんだ……床屋の醍醐味だよな）」

散髪での最も気持ちいい一時も堪能した燈弥はまさに夢心地。思わずウトウトとしていたところを、少女に優しく起こされる。

「眠ってはいけませんよ、勇者様」

「ん……ああ、あまりにも気持ち良かったから」
「ふふ、ありがとうございます」

体を起こして肩を回してみると、先程と感覚が全く違う。体全体が軽くなったのようだ。

「ん～！　素晴らしいサービスだった！　さいこ～　堪能させてもらいました。このまま独立して自分の店でも持ったらどう？」
「い、いえ、そこまでは流石に……」

燈弥のリップサービスに少女は恥ずかしそうに顔を赤くして俯く。

「それに、わざわざ君が裸になんなくてもいいと思うけど？　折角このマットみたいな生地もあることだし、濡れてもいいような服とか着たら？」
「これは、そういったことを求めるお客様もいるので……」

少女はやや上目使いになりながら燈弥を見る。燈弥も合点がいった、というか最初に考えていた通りの展開になったと思った。

「あ、俺はやんてくていいよ？　折角マッサージしてもらったのに、そんなことしたらまた疲れちゃうし。二度手間は嫌いなんでね」
「あ……申し訳ございません！」

自分の手際の順序に不備があったのを注意されたのだと、少女は視線を落とす。

「いやいや、君の対応は正しい。旅疲れの客人に対していきなりえっちしましょうはどうかと思うしね。……それと、後で上の人にも一言伝えといてよ。『常連ならともかく、一見さんにこんなことや

ったら変な警戒心持たれるだけだよ』ってね」
「は、はい？」

少女からやや落ち着かないような仕草を感じ取ると、燈弥は手だけで下がるように合図する。少女は無言で頷き、いそいそと器具の後片付けを始める。

「それでは、失礼します。お着替えも脱衣所に置いてありますので……」
「ん、どーも。機会があったらまたマッサージをお願いするよ」

少女は軽く頭を下げ、物音一つ立てることなくその場を去っていく。燈弥は体を流しながら、彼女に揉まれた個所を摩っていた。

「（妙なものを刺されたり、取り付けられたりってのはないか。ハニートラップにしては随分あっさりと引き下がるしな……）」

今度は風呂場全体を軽く見まわし、散策を始める。少女がマットや道具を取りだした用具入れを除いてみようとしたが、扉は何やら固く閉ざされていて全く開く気配がない。

「おっかしーなぁ……　鍵のようなものは付いてないし。あの子は普通に開けてたように見えたけど……　何かコツでもあんのかな？」

ここまで来ると単なる興味本位とはいえ、燈弥はそのドアを開ける事に夢中になっていた。ドアには持ち手の金具が一つあるのみ。その他に怪しい所はない。ここまでして開かないとなると、ますます中に何があるのか気になり、そのまま時間が経つのを忘れて扉の謎解きに夢中になっていった。

「トーヤ様！？　まだお風呂にいらっしゃるのですか！？」

そして、とうとう脱衣所の向こうからセレーヌに心配されるまで時間が過ぎ去っていた。燈弥もはっと気づき、慌てて湯船の中に戻る。

「いや～　いい湯ですねここは！　ついつい時間を忘れて入っていました！」

「アイゼン様がお戻りになりましたので、出来るだけ早くお上がりになってください！」

そう告げると彼女の足音が遠くなっていく。扉を開けられない悔しさで一杯だった燈弥の頭の中も、次第にこの町の領主の事へと興味が移る。

「（あんなものを寄こしてくれるとはね……　ちーっとばっかし気になるな。もちろん悪い方に）」

頭の先まで湯船に沈め、そのまま3分ほど潜水してから浴槽を上がる。燈弥は不敵に笑いながらも、この先の謁見に嫌な予感を感じられずにはいられなかった。

4.　そんなりゆうかよ

「お待たせしました」

異世界の服はベストの上にジャケットを羽織り、下はキュロットという実に中世なスタイルであった。素材が悪いのか、服の紡績技術が発展途上なのかはともかくとして、肌触りは全体的にごわごわしている感じである。何よりも見た目……　ビジュアルが日本人の自分に全然合ってないことを気にしつつも、燈弥は領主の部屋の中へと案内される。

「ほほう、そなたが異世界から来たという勇者か……　なるほど。言い伝え通り、確かに顔立ちも我々のものとは全く違うの」

この世界では天馬のようなアジア系の顔、髪、目の色は珍しいらしく、領主の男はしばらくの間舐め回すかのように天馬の体を観察する。男に、しかもおっさんに視姦されるのは勘弁してくれと言わんばかりに、燈弥の表情が嫌悪感丸出しのものになる。

「……おっと、失礼。紹介が遅れたな、私がこのスミナフを治めるアイゼンである。トーヤ殿、そなたの実力はそこのセレーヌから粗方聞いておる」

燈弥の後ろに控えているセレーヌが軽く礼をする。

「して、アレは気に入って頂けたかな？」

アイゼンは大層な髭をさすりながら、にやにやと意地の悪い表情

を浮かべる。燈弥は頭を下げ、顔の前で軽く手を組んで答えた。

「堪能させて頂きました（マッサージの方をね）。私めのようなよそ者にあのような心遣い、もったないないくらいです」

それまでとは打って変って恭しい燈弥の受け答えに、後ろから聞いていたセレーヌは激しいくらいの違和感を覚えていたが、一応目上の人への礼儀は心得ているのだと少し感心した。領主もその答えに対して、満足そうに笑いだす。

「はっはっは。うむうむ、英雄となろう者はそうでなくてはな。お望みならば更に貴殿好みのモノを用意してやるぞ」

「いえ、先程のが私の好みですので」

「ほう……　使い込んだのモノも、それはそれで味わいがあるのだがな……」

「自分で調理していくのも楽しみの一つですので」

代名詞を目的語とした男同士の会話がしばらく続く中、アイゼンはふと思い出したかのように要領を得られずにいるセレーヌの姿に気づき、軽く咳払いする。

「さて、それではトーヤよ。貴殿にはこの世界の現状を説明してあげなくてはな」

「異世界から勇者を呼びだすということは、余程のことなのでしょう」

燈弥は嬉しそうに答えるが、先程のスミナフの町の状態が頭の隅に引っかかっていた。アイゼンが顎で合図を送ると、初老の召使いが一枚の大きな紙をテーブルの上に広げる。

「これは……　この付近の地図ですか？」
「いや、この世界全体の地図だ。現時点で我々が知り得る地域に限定されてはいるがな」

アイゼンも口を窄めていはいるが、正直地図と呼ぶにはお粗末すぎる出来である。背景色の異なる部分……おそらくは国を分けているのだろうが、薄赤色の方はおそらく地域や町の名が詳細に書きこまれているにも関わらず、薄水色の方はいくつかの名詞が大きな〇と共に書かれているだけである。大体国土が同じくらいの二つの国らしきもので東西を分け、その北には国土の半分はありそうな大きな湖がある。湖の北部には大きな島があり、そこにも詳細な解説は無い。

燈弥にとって、この地図で最も気になった点は『海』が無い事であった。ほぼ地図の端に沿って険しい形をした山脈が国と湖を全て取り囲んでいる。アイゼンの言う通りならば、この世界の、この国の人々は未だに周囲の山から外に出る事が出来ないでいるということであった。

「こちらの世界の文字はまだ全く読めないのですが……　書き込みの量から言ってこの薄赤色の部分が今いるシンクラッドを表しているんですか？」
「はい、そうでございます。そしてこの青い部分が、現在我々と敵対関係にあるブルアール帝国でございます」

燈弥はアイゼンに質問したつもりであったが、地図を用意した男が答える。

「敵対関係って……　国交は当然無い、か。もしかして戦争とかやっちゃってたりして」
「おっしゃる通りでございます」

男が淡々と答えると、燈弥は急に首を傾げながら表情を険しくする。

「……どうされました？　トーヤ殿」

「いや、俺が呼ばれたのって、もしかしてこのブルアールって所との戦争を終わらせるため……とか？」

「そうですぞ？」

トーヤを除くその場の全員が彼の返事に不思議そうな表情をしていた。

「相手って……人間ですよね？」

「当然でしょう。しかし皇帝という独裁者に心を奪われた哀れな者たちです。そもそも戦乱の発端は……」

初老の男が何やらこの世界の歴史について長々と話し始める。一言に要約すると『全部帝国が悪い』。この戦争は既に８０年近く続いていて、現在は軽い小康状態らしい。そしてこの国の国王曰く『戦いの度に大事な民の命を失われていくのは心苦しいから、勇者を呼んでとっとと帝国を倒してもらってちょ』というわけで、燈弥がわざわざ呼ばれたらしい。

「は～　ふ～ん。戦争ねぇ……」

「と、トーヤ様……！？」

先程の恭しさはどこへやら。腕を組んで体勢を崩し、少し、というか思いっきり不満そうな声を上げる燈弥の姿が、彼を連れて来た当のセレーヌを凄く不安にさせる。

「古の悪の大魔王とかじゃないのか……」
「えっ！？」
「戦争かぁ……　ちょっと面倒臭そうだなぁ……」

周りの不安を全く意に介さないかの如く、燈弥は滅茶苦茶なことを呟き続ける。

「勇者とか世界を救ってくれとか言うから何をやらされるのかと思ったけど……　いや、いいんだよ？　戦争。そっちがやって欲しいってお願いするんだったらやってやるさ」

あまりにも物事を簡単に言う異邦人に、周囲も戸惑いを隠せない。

「んで？　俺は何やればいいの？　何やらせてくれるわけ？」
「え？　あ、それは……」
「まさか一人で敵陣に突っ込ませるとかないよね？　わざわざ呼んどいてさ」

燈弥の急激な態度の変化にアイゼンも困惑し、言葉を出せないでいる。そんな彼を見かねてすぐに後ろからセレーヌのフォローが入る。

「そ、そういった詳しいことは国王陛下との謁見の方で……」
「あー……そうだね。それなりの役職は確保して頂かないと」

堂々の遥か上を通り越して失礼極まりない燈弥の物言いに、これ以上は危険だとセレーヌは直感し、老召使いと共にその場の収拾にあたる。

「きょ、今日のところはこれで……！　アイゼン様も視察でお疲れ

ですし……」
「ああ、そうでしたね。お忙しい所失礼しました」
「う、うむ……　今夜はこの屋敷に泊まって、ゆくがよい……」
「どうも～」

口の上では勇者を歓迎する言葉を捻りだしているが、アイゼンの両手はぷるぷると震えていた。燈弥が１０。ほどお辞儀をすると、すぐにセレーヌが彼の首根っこを捕まえて部屋を退出する。勢いよく閉められたドアの向こうからは、ばたばたという足音と何やら説教のような声が聞こえて来る。物音が遠ざかって行くのを確認すると、アイゼンも深い溜息をついた。

「だ、旦那様……」
「大丈夫だ。この程度で取り乱す儂ではないわ」

そう言いつつもアイゼンのこめかみのあたりには薄らと青筋が通っていた。老召使いは急いでお茶と茶菓子を準備し、主人の気をなだめようとする。アイゼンは男の淹れた紅茶を一気にがぶ飲みすると、再び大きく息を吐きだす。

「全く、いい気になりおって……　だが、奴の力は本物のはずだ。言い伝えの通りならな」
「しかし旦那様、あのような者をのさばらせてよろしいのですか？」

ふん、と主人は軽く息を鳴らす。

「構わん。利用出来るものは利用しないとな。これで戦局がこちらに傾けばそれでよし。使えぬと解かったならばすぐに始末出来るだろう。いずれにせよ、ああいう者は早いうちに媚を売っておくに限る」

すると、部屋に小さなノックの音が響く。アイゼンが返事をするとゆっくりとドアが開き、先程燈弥の「世話」をした少女が姿を現す。

「何か御用でしょうか、旦那様」

少女の瞳は先刻にも増して感情の色がこもっていない。

「名はなんだったか？」

「ニューナです」

「ふん、お前は随分あの男に気に入られた……　のかどうかは分からんが、使えはするだろう。この儂のために存分に働いてもらうぞ」

その後に下されるアイゼンの命令に、ニューナの瞳が微かに動いた。

4.　そんなりゆうかよ（後書き）

アイゼンの容姿は次話でちゃんと書きますよ～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4266z/

チートな俺が異世界へ進出！

2011年12月19日18時48分発行